―― 報　告 ――

# 看護基礎教育と看護実践とのギャップを縮める「総合実習（チームチャレンジ）」の評価 ―看護学生の実習記録の分析―

奥　裕美[1)]，松谷　美和子[1)]，佐居　由美[1)]，大久保　暢子[1)]，安ヶ平　伸枝[1)]，
佐竹　澄子[1)]，中村　綾子[1)]，伊東　美奈子[1)]，堀　成美[1)]，井部　俊子[1)]，
西野　理英[2)]，高井　今日子[2)]，寺田　麻子[2)]，岩崎　寿賀子[2)]，石本　亜希子[3)]

## 抄　録

【目的】看護基礎教育課程で習得した看護実践能力と，臨床で求められる能力とのギャップを縮める実習のあり方を探るため，臨床実践により近い実習形態をとる総合実習「チームチャレンジ」を行った。本研究の目的は，学生の実習記録から学習内容を分析し実習目標の達成を評価することである。

【方法】実習を経験したＡ看護大学４年生５名の実習記録から，１）時系列に学びの内容を抽出し，学生の実習のプロセスを実習目標の４つの視点から分析し，２）看護技術の経験を実習前後で比較した。本研究はＡ大学研究倫理審査委員会の承認を得て行った。

【結果】１）①対象把握の視点：学生はカルテからの情報収集を行う段階から，看護師や患者本人からも患者に関する情報を得ることができるように変化していた。②最適健康状態への実践の視点：予防的関与の必要性を感じる段階から，予測外の状態の変化に合わせて行動できるように変化していた。③メンバーの一員としての視点：情報交換の重要性を認識する段階から，情報の取捨選択を行った上で実際に相手に伝えることの難しさに気づくことができるようになっていた。④役割の把握と機能の発揮の視点：１人の患者から，複数の患者のスケジュールを把握し，さらに計画を適宜修正し，看護を実践することの必要性を認識していた。２）看護技術の経験項目は全体的に増加しており，特に診療の補助業務に関わる項目では，少なくとも見学し，援助があれば行うことができるようになった項目が増加していた。

【考察】学生は，臨床看護師の支援を受けながら，医療チームの中にある自分を意識し，複数の患者を受け持ちながら個々の患者の最適健康状態に向かって看護技術を活用し，チームの中で看護実践を行うことが出来たと認識しており，実習目標に適った実習が行われていることが推察された。

**キーワード：**看護基礎教育，統合実習，リアリティショック，実習記録

## Ⅰ．はじめに

わが国では急速な人口の高齢化や疾病構造の変化により，生活習慣病や終末期の患者，日常生活動作に介助を必要とする患者が増加している。また，科学技術の革新による医療の高度・複雑化により，医療の現場においては常に高度で複雑な治療と，濃厚で手厚い看護が求められている。一方，こうした状況に適合した優れた能力を持った看護師を育成する役割を担う看護基礎教育の現場においては，看護師免許取得前である学生による患者への直接的な医療技術の提供の機会は患者の安全確保と人権に対する配慮により減少する状況にあるといわれている（松谷ら，2009）。そのため看護師としての役割を果たすために必要な臨床実践能力の獲得は，実質的には看護基礎教育機関を卒業し，免許取得後の就職先での日常業務を通じたトレーニング，いわゆる on the job training（OJT）に依拠している。2009年７月には，保健師助産師看護師法，および看護師等の人材確保の促進に関する法律の一部が改正され，新卒看護師に対する研修内容の充実やそのための環境整備が推進されていく

受付日 2009年８月26日　受理日 2010年２月１日
１）聖路加看護大学，２）聖路加国際病院，３）初台リハビリテーション病院

ものと考えられるが，多忙な臨床現場で実際に業務を行いながら学ぶことは就職後一年未満の新卒看護師にとって，また教える側の看護師にとっても容易に行うことができるものではない。2007年度の病院勤務常勤新卒看護師の離職率は9.2％に上っており（日本看護協会；2009），その原因のひとつに，「教育機関で学んできたことと，臨床現場とのギャップ」，いわゆるリアリティショックがあるといわれている。

そこで，リアリティショックを軽減し，「学生」から「看護師」へのスムーズな役割の移行がなされるよう，看護基礎教育においても教育方法の工夫が行われている。A大学で行っている臨床現場と教育機関との協働による「総合実習（チームチャレンジ）」(以下チームチャレンジ）もそのひとつである。４年前期に行われる基礎教育課程最後の実習として位置づけられている必修科目「総合実習」の領域のひとつであり，９つある領域の中から学生が実習を行いたい領域を選択するものである。学生は担当看護師の支援を受けながら３週間単一の病棟で，受け持ち患者を１名から徐々に複数名へと増やしつつ，夜勤や遅番業務の時間帯にも実習を行う。(佐居ら，2009；松谷ら，2009)。

## Ⅱ．研究目的

本研究の目的は，チームチャレンジを行った学生の実習記録から学習内容を分析し実習目標の達成を評価することである。

## Ⅲ．研究方法

### １．研究対象

2008年度にチームチャレンジ実習を経験したA大学看護学部４年生15名中，研究参加に同意した５名の日々の実習記録（Daily Feedback Sheet，以下DFS）56通，および技術自己評価票５通を対象とした。DFSは学生が毎日の実習ごとに目的，実習中に行ったこと，終了後の感想や意見などを自由に数行で記載する用紙であり，具体的には，「受け持ち患者」，学生の「本日の学び」「看護師のコメント」「教員のコメント」「次回の学習目標」の５項目を記載する。本研究では特に「本日の学び」の欄に記載された内容を研究の対象とした。これは，学生がまさに実習中に考えた事実に関するデータを収集したいと考えたためである。技術自己評価票には基本的看護技術項目がリストされており，学生が実習中に経験した項目と経験回数，技術施行の自立度を記載する。実習前の状態と比較することができるよう工夫された用紙である（項目については図１・２参照)。

### ２．分析方法

すべてのDFSから，記載された学びの内容を学生ごとに時系列に並べた。また，実習目標である「対象と環境との相互作用を力動的に把握し，対象の最適健康状態を生み出すことが出来るよう，メンバーの一員として主体的に自らの役割と機能を発揮し，働きかける能力を養う」を４つの視点「対象と環境の把握の視点」「対象の最適健康状態への実践の視点」「メンバーの一員としての視点」「役割と機能を発揮する視点」に分類した。それぞれの学生の学びの記述を内容ごとに時系列に学習の視点に合わせて分類した。さらに５名分のデータを統合し，内容の分析を行い，共通した出来事や特徴的な出来事を明らかにした。

また，技術自己評価票から，学生の実習前後の基礎看護技術の到達度を比較した。分析は複数の看護系教員で行い，妥当性を確保した。

### ３．倫理的配慮

研究協力者のリクルートは，実習の評価終了後に説明書を用いてチームチャレンジを履修した学生全員に一斉に行った。筆跡から協力者が特定されないよう同意書の開封，記録用紙の回収および内容の電子データ化を，実習に関係しない研究メンバー以外のものが行うなどの配慮を行った。本研究は研究者の所属する大学研究倫理審査委員会の承認を得た上で行った（承認番号08-055)。

## Ⅳ．結　果

### １．学生の実習日程

現場の看護師の勤務時間帯と同じ時間に実習を行うのがチームチャレンジの特徴であり，学生の実習日程も病棟の特性や担当看護師の勤務と調整した上で決定する。各学生の実習日程と概要を表１に示す。全ての学生は実習初日に担当看護師のシャドーイング（後追い）実習を行い，実習病棟の業務の流れや環境を知り，翌日から１名の患者を受け持つ。学生の様子や患者の状態から徐々に受け持ち患者を増やすが，この判断は担当教員と看護師，学生との話し合いの上で行う。実習中夜勤時間帯での実習は２回，遅番時間での実習は１回行うがその時期は学生によって様々である。なお，2008年度のチームチャレンジ実習は，同一病院内の外科，整形外科病棟の２病棟において行われた。

### ２．実習目標と学生の学習プロセス

５名の学生の記述した内容を時系列に並べ４つの視点ごとに分類すると，表２のようにまとめられた。

#### １）対象と環境の把握の視点

学生はまず，患者を受け持つために必要な情報をカル

表１　学生実習日程表

D：日勤帯（８時間）　N：夜勤帯（16時間）　d：遅番帯（８時間）

| | Day 1 | Day 2 | Day 3 | Day 4 | Day 5 | Day 6 | Day 7 | Day 8 | Day 9 | Day10 | Day11 | Day12 | Day13 | Day14 | Day15 | Day16 | Day17 | Day18 | Day19 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 学生 A | D | N | | | D | D | d | N | | | | D | D | | | D | D | D | |
| 受け持ち患者 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 学生 B | D | D | D | | | d | N | | | | D | D | N | | | | D | D | D |
| 受け持ち患者 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 学生 C | D | D | N | | | D | D | | D | D | N | | | | | D | D | d | |
| 受け持ち患者 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 学生 D | | D | D | D | N | | | | D | D | D | | D | D | N | | | D | d |
| 受け持ち患者 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 学生 E | D | D | | D | N | | | D | D | D | | d | D | | D | D | N | | |
| 受け持ち患者 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

表２　学習目標と学生の学習プロセス

| | | 実習開始 → 実習終了 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | １～２日目ごろ | | ５～６日目ごろ | | 11～12日目ごろ |
| 対象と環境の把握の視点 | 分類結果 | ・カルテや看護師からの現在の受け持ち患者情報の把握 | ・患者自身からの患者情報の把握 | ・患者の個別性を考慮した看護への意識 | ・把握した情報の理解と統合の意識 | ・看護師の支援を得て把握した情報を判断しケアを実施 |
| | 学生の記述例 | ・（看護師の）助言を得て患者の観察ポイントを考えることができた。<br>・ナースに欲しい情報を教えてもらった。 | ・朝の（カルテからの）情報収集と申し送り，最初の（患者）ラウンドからどのように優先順位を変更するのかがよくわかった。<br>・疾患や状態を把握していなくても患者さんに聞けば入れるケアも多くあった。<br>・患者の言葉をうまくひろうことがポイントだということもわかった。 | ・患者の生活パターンや意識を尊重して行っていくことが大切だとわかった。<br>・回復，リハビリ状況は一様ではないため，その人にあったフォローアップが求められる。 | ・メカニズムと症状が頭の中できちんとつながった。<br>・注意すべき点の把握が少しずつではあるができるようになった。<br>・自分がどうアセスメントしたかを（看護師に）伝え，適宜相談することができた。 | ・受け持ち看護師と相談して協力してもらったり，遅番（看護師）のヘルプも借りながら（自分で）ケアできてよかったと思う。<br>・（看護師に）相談しながら責任を持って患者さんのケアを行えたと思う。 |
| 対象の最適健康状態への実践の視点 | 分類結果 | ・過不足のない看護実践と未来を予測した関与の必要性を意識 | | ・日々変化する患者状態と患者のニーズへの対応 | | ・知識と実践の統合の意識 |
| | 学生の記述例 | ・患者さんの状態を適切にモニタリングしていくことで，術後の合併症予防や疼痛の早期対処，不安軽減等ができることがわかった。<br>・起こりうるリスクのある問題を予想しながら予防的に動くことが必要。患者の ADL を高めていくための援助（病棟内でもできることは自力で行ってもらうなど）を理解できた。<br>・来週あたりの転院が決まって不安になっている患者さんを見て，転院の前に今ここでできることをする必要を感じました。<br>・ADL が完全でなくても，患者の希望があれば退院に向けてのケアの方向性を考えていく必要があるということが理解できた。 | | ・患者のニーズに臨機応変に対応しながら行動していきたいと思う。<br>・昨日よりできることが増えていたりどんどんよくなっていく患者さんを見て，患者さんの回復にあわせた体動制限をしっかり把握することの必要性を感じた。<br>・予測しながらそれに必要な準備が大切なのだとわかった。 | | ・MMT（徒手筋力テスト）をどのように評価に使用すればよいか，患者の日常動作の中で，どこに着目すればよいのか理解することができた。<br>・メカニズムと症状が頭の中できちんとつながったので，患者の一つ一つの反応を落ち着いて正しくアセスメントできる。 |
| メンバーの一員としての視点 | 分類結果 | ・看護師間の情報の共有の必要性の意識 | ・必要な情報の取捨選択の必要性の意識 | | ・他部門や患者，家族を含めた医療チームの意識 | |
| | 学生の記述例 | ・勤務交代時にいかに的確に伝えるかで，ケアの円滑性につながると感じた。 | ・ただ単に情報を伝えるだけでなく，優先順位をつけて必要な情報を送るということを知った。<br>・的確に端的に伝えることの重要性を学んだ。 | | ・医師，看護師，理学療法士を交えたカンファレンスがあり，患者の今後の方向性について聞くことができた。医師にも疑問点を聞くことができた。<br>・医師，理学療法士，看護師の情報共有の仕方を学んだ。必要な情報をチーム間で共有する重要性を感じた。<br>・理学療法士と相談し，部屋（病室）でもできるリハビリを聞いたので，ケアプランに入れたいと思う。<br>・ケアの対象は本人だけでなく家族も大きく関わってくると感じた。 | |
| 役割の把握と機能を発揮する視点 | 分類結果 | ・患者のスケジュールの把握と調整の難しさの意識 | | ・効率的なスケジュール作成のための工夫と臨機応変な対応の難しさの意識 | | |
| | 学生の記述例 | ・どの患者さんの病室からケアを進めていくか優先度を考え，患者の一日のスケジュールをふまえながら効率よくケアを進めていかなければならない。<br>・複数の患者を受け持つようになり，よりいっそうケアの優先度，時間調整の大切さを学んだ。同時進行する際の頭の切り替えが随時求められることを実感した。<br>・患者が一人ではないだけに，アセスメント一つに必要以上の時間をかけることは難しい。一連のつながりがスムーズに行かせるということも重要なのだと思う。<br>・患者のニーズに臨機応変に対応しながら，他のケアの優先度を考えて行動していきたいと思う。 | | ・３人の患者を受け持ち，それぞれの患者の予定が重なってしまいそうな場合に，その調整を行うこともケアを提供するために必要なことであると理解できた。<br>・ナースコールがいつ鳴るか，他の患者さんに何を言われるかが予測できないので，十分余裕を持ったプランニングをすることが重要であると学んだ。<br>・うまくいかないと感じていたタイムマネジメントに対して，リハビリの時間など，具体的に決まっていることから組み立てていくということが，理解できた。 | | |

テや看護師から収集していた。そのうえで患者自身からも情報を得られることに気づき，それらを総合的にアセスメントすることも看護師の支援を得ながら行うことができていた。

**2）対象の最適健康状態への視点**

過不足のない看護，予防的な看護の必要性については，実習初期から意識することができていた。その後，日々刻々と変化する患者の状況や予想外な変化にも臨機応変に対応することの必要性にも気づいていた。その上で，学んだ知識を生かして患者の最適健康状態をめざした看護を実践することができるという感覚を得ていた。

**3）メンバーの一員としての視点**

まずは看護職間での情報交換の重要性を感じ，その際には必要な情報と不必要な情報を取捨選択したり，優先順位を考えて相手に伝えることが必要であるということに，実習の初期から中盤にかけて気づいていた。さらに看護職間だけではなく，関与する他職種や家族も含めて医療チームをとらえることの必要性を実感していた。

**4）役割の把握と機能を発揮する視点**

病棟における自らの役割を果たすためには，まず自らの行動計画を立案し，時間管理を行わなければならない。学生は１名から始まり，徐々に複数の受け持ち患者のスケジュールを把握して効率よくケアを進めていくことの必要性を感じていた。その後突然のナースコール等，受け持ち患者以外への対応も行うことを考慮に入れ，適宜計画を修正することや，より余裕をもった計画を立てることができるようになっていた。

### ３．基礎看護技術の到達度

看護基礎技術53項目について，実習前後の実施・未実施項目の変化について５名の学生の平均値を図１・２にまとめた。看護基礎技術項目は，学生が臨床現場で遭遇する可能性が高いものを中心に，学生が単独で実習することが可能な，主に療養上の世話や日常生活の援助に関わる43項目，看護師または看護教員の監視下で実習することが可能な，主に診療の補助に関わる30項目について,「見学したことがある……１」「(看護師または教員の）援助が必要……２」「(看護師または教員の）確認が必要……３」「自立して行うことができる……４」の４段階で学生が自己評価するものである。

病室整備やベッドメーキングなど，患者の療養環境整備に関する項目，バイタルサインや経皮的酸素飽和度の測定など遭遇する確率が高く，患者への身体的侵襲が比較的少ない項目については，チームチャレンジ実習以前に殆どの学生が自立して行うことが出来ていた。また，入浴や吸引，経管栄養の管理，中心静脈栄養の管理など，受け持つ患者の特性によって経験する機会に偏りがある項目については，実習前との変化が見られないものも多かった。しかし，全体的に経験項目は増加しており，特に診療の補助業務に関わる項目では，これまでの実習で殆ど経験がなかったものが，少なくとも見学でき，援助があれば行うことができるようになっていた。特に，点滴静脈注射の管理や，ヘパリンロック，輸液ポンプの操作，採血，血糖値の測定など，臨床では遭遇する確率が極めて高いにも関わらず，学生の経験が少なかった項目について，経験数を増やすことが出来ていた。

## Ⅴ．考　察

### １．総合実習の目標とチームチャレンジ実習の評価

総合実習の目標を「対象と環境の把握の視点」「対象の最適健康状態への実践の視点」「メンバーの一員としての視点」「役割の把握と機能を発揮する視点」の４つに分け，学生が実習中に記述したDFSの内容を分析した。学生の記述は特に実習目標を意識して書かれたものではなく,「本日の学び」として日々の実習後に学生自らが学んだ，と思ったことを自由に記述したものであるが，全体として４つの側面は充足されており，実習全体の目標として掲げた内容について学習することができていたと考える。

**1）学生の体験の順序性について**

また，それぞれの学生の学びには結果に示したような一定の順序性があった。例えば,「対象と環境の把握の視点」において実習当初は患者に関する情報を主にカルテや看護師が話す内容から得ていたが，数日経過すると，それが患者本人からも得ることができることがわかった，と多くの学生が記述していた。これは学生が過去の実習での経験から，わからないことは人に聞く前にカルテや資料などを調べて解決する，という志向性を持っていたが，複数の患者を受け持ったり，ナースコールなどで受け持ち患者以外の多くの患者に迅速に対応しなければならない状況となり，すぐに解決しなければならない問題について，患者本人に聞くことで解決する問題もあるということを経験することができたからであると考える。さらにこうした患者とのコミュニケーションの深化は，患者を医療チームの一員としてとらえることの必要性を実感することにもつながる。同時期には「対象の最適健康状態への実践の視点」においても，患者にとって学生がよいと考える看護をするだけにとどまらず，患者のニーズや患者の状況をふまえた実践を行うことについての記述が多くされていた。

また,「メンバーの一員としての視点」では，学生は情報交換の重要性を意識するという段階から，単に情報をやりとりするのではなく，必要な情報を選択したり，重要度を判断した上で伝えることが必要だという，情報交換のあり方についてまで考えることができるようになっていた。これは実習中盤より受け持ち患者に関するシフト間の業務の引継ぎ，いわゆる申し送り，を実際に行ったことがきっかけになっていると考える。学生が直

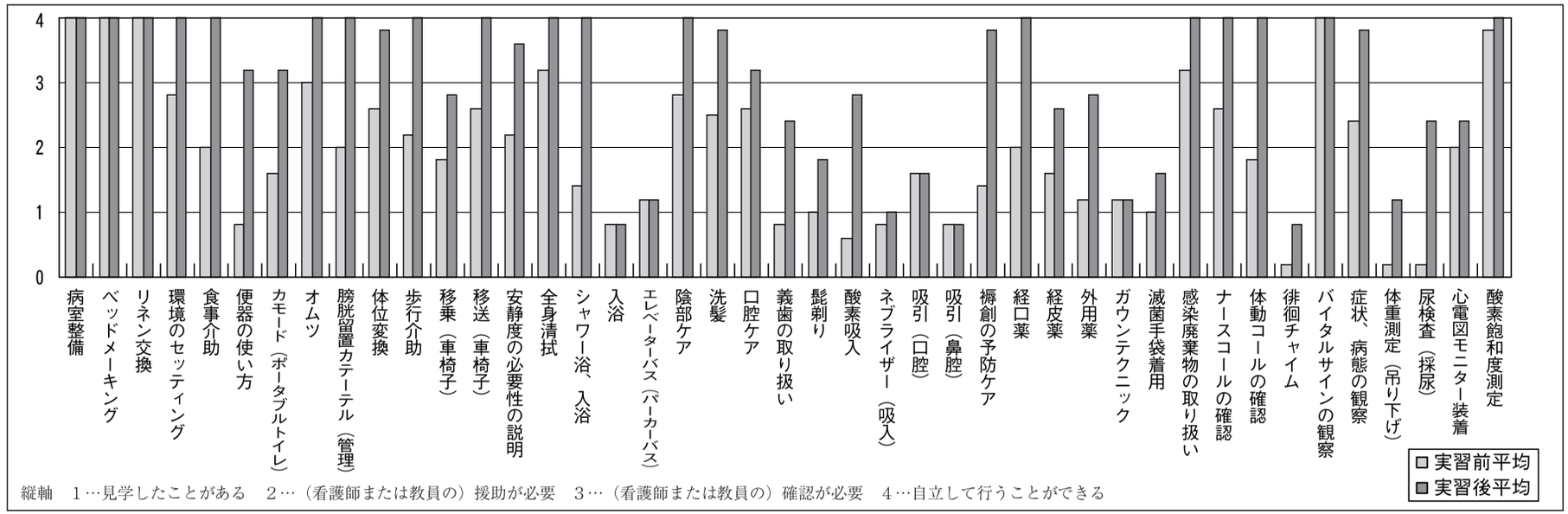


図１　技術項目実習前後比較（主に日常生活の援助）

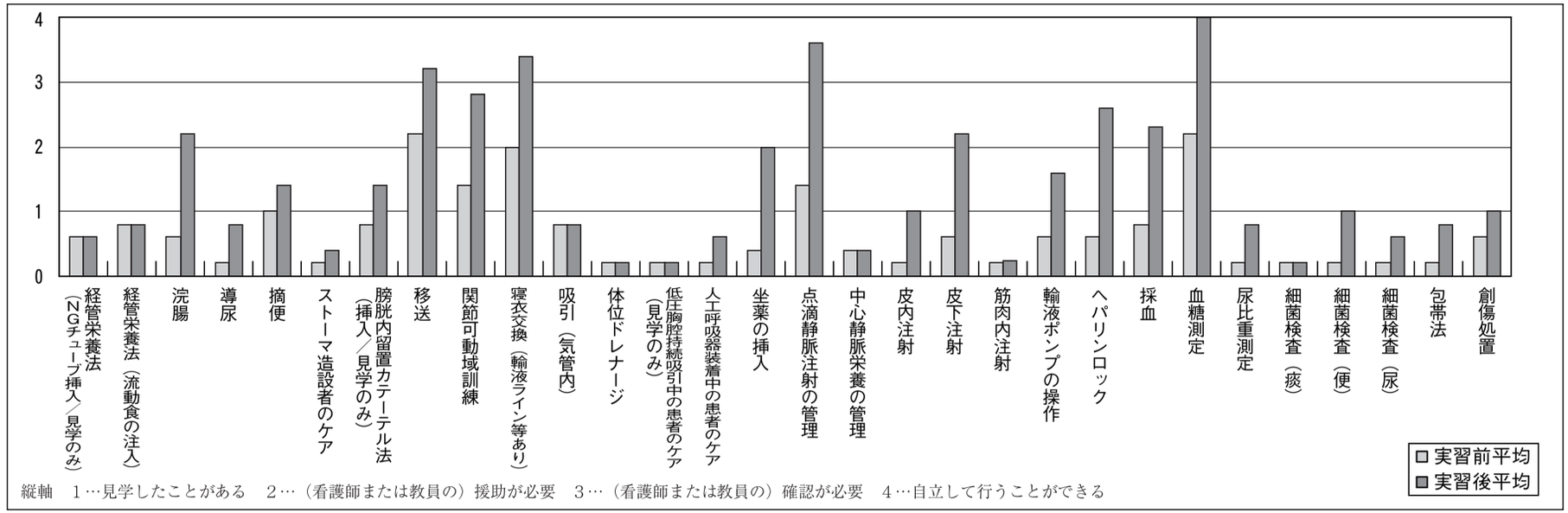


図２　技術項目実習前後比較（主に診療の補助）

接次のシフトを担当する看護師に申し送りを行うということは，これまでの実習では体験していなかったことであり，自分が持つ情報を的確に伝達しなければ継続的な看護が行えないという責任を強く感じることとなる。実際に申し送りを行う前には，担当看護師にどのように何を伝えるべきなのか相談したり，実際に行う際も担当看護師が足りない情報を補足したりと支援を受けながら行うが，学生は限られた時間の中で自分が何を伝える必要があるのかということをより具体的に考えて行ったことが，こうした意識の変化に影響を与えたと考える。

さらに，情報交換の対象は看護職同士から他職種や家族を含めたメンバーの一員へと徐々に広がっていた。これは実習期間中に患者やその家族，関係する他職種との関係性が自然に深まったということのほか，学生が担当する患者を選択する際には，疾病の理解や管理のほか看護職が医療チームの中の一員であるという視点も広げられるような配慮を行ったということも影響している。例えば複数患者の受持ちを開始する際，１名は比較的術直後で医療的処置や観察が必要な患者，１名はリハビリ期で退院や転院のため，家族や理学療法士，ソーシャルワーカーとの連携が必要な患者を選択するということや，そうした患者がいない場合でも病棟で行われている他職種とのカンファレンスに参加したり，ということである。

最後に「役割の把握と機能を発揮する視点」においても，自分の受け持ち患者に対してのみケアを行う計画から，受け持ち患者以外でも突発的に起こる事項に対応できるような計画へと変化していた。これも実習を重ねるにつれ，担当患者対学生という関係のみに留まらず，徐々にナースコールに応答したり，病棟にかかってくる電話に応答したりということを学生に促し，病棟全体の業務の一部を担っているという役割意識を持たせるような工夫を行ったことが影響していると考える。

こうした順序性をもった変化のプロセスは，チームチャレンジ実習を行った学生が突然に変化するわけではなく，これまでの実習で体験したものより複雑な看護実践を行うことで，徐々に変化していくステップの一例を示したものと考える。より複雑なスキルの獲得を支援するためには，徐々に複雑さを増す小世界（increasingly complex microworlds：ICM）に基づいて学習環境を設計することが有効であるといわれている（Burton ら，1984）。チームチャレンジ実習において学生はこうした小世界を積み重ねた学習を行い，実習の目標を達成していたものと考える。

### ２）技術到達度の変化について

実習目標の４つの視点のなかでも「対象の最適健康状態への実践の視点」や「役割の把握と機能を発揮する視点」を達成するためには，いわゆる基礎看護技術が的確に実践できることも必要である。本研究においてはこうした看護技術の経験項目は全体的に増加しており，特に診療の補助業務に関わる項目では，少なくとも見学し，援助があれば行うことができるようになった項目が増加していた。

これは単に実習が重ねられたことによる，時間の影響とともに，受け持ち看護師が積極的に学生に実践することを促した，ということも影響している。特に診療の補助業務に分類される技術を学生が行う場合，担当教員や看護師の監督下で行うことが必要であるが，チームチャレンジでは，担当教員は病棟に常駐しないため，病棟での学生指導の主体は担当の看護師となっている。看護師にとっては自分が行ったほうが迅速に行うことができる技術の実践でも，可能な範囲で学生に行わせたり見学させたりといった機会を提供した。また，いわゆる身体の侵襲を伴う実践であっても，行う対象は受け持ち患者に限定しなかった。例えば受け持ち患者ではなくても，必要な患者の血糖測定は学生が行った。もちろん事前に手技の確認を行い，患者側を含めた看護師の判断があった上であるが，これによって，学生が看護技術を提供する機会が拡大しただけでなく，多くの機会を与えられることによって反復して技術を自分の身につけることにつながった。

## ２．学生から看護師への役割移行に対する影響

チームチャレンジ実習では，実践により近い環境を学生に提供するため，教員は必要以上に病棟に滞在していない。また，学生は１病棟に３～４名ずつ配属され，さらにそれぞれの担当看護師の勤務スケジュールに応じた実習日時となるため，病棟には学生が自分ひとりしかいない，という状況で実習を行うことも多々ある。疑問があれば病棟に滞在する教員に相談し，悩みがあれば共に実習を行う友人と話をしたりすることができた過去の実習と，チームチャレンジ実習は大きく形を変えているといえる。こうした状況に「はじめは谷底に突き落とされたような気持ちだった」と感想を語る学生もいた。しかしそのような環境の中で学生は，結果２－３）に記載したように看護職との，さらには患者，家族，他職種との関係性を徐々に築き，メンバーの一員としてその場にいることができるようになっていた。

さらに複数の患者を受け持つことや，夜勤，身体侵襲をともなう処置を行うことなどは，実際の看護の現場では当たり前に行われているのにこれまでに経験がなく，学生は「就職したら大変そうだ」，と想像するだけであった。チームチャレンジ実習で学生は結果２－４）や結果３に記したように，看護師や教員のサポートを受けながら徐々に受け持ち患者数や看護技術経験を増やすことが出来ていた。

就職前の学生にとって不安の多い臨床看護実践を，学生であるからこその手厚い支援を受けながら体験することができるということから，学生実習と臨床実践の乖離しているといわれる部分を繋ぐ実習として，この実習を

行う意義は大きいと考える。

### ３．研究の限界

本研究はチームチャレンジ実習を行った学生が記載した「本日の学び」の項目に記載された内容から，実習目標の達成について分析し評価するものであるが，研究対象は５名でありデータには偏りがある可能性がある。また，学生の学びには文章として記載されないものもあると考えられ，インタビュー調査などによるデータの補足により，より詳細な分析を行うことができた可能性があると考える。

また，本研究で明らかになったような学習の順序性のほか，夜勤や遅番業務時間の実習をすることが，「メンバーの一員としての視点」を大きく高めるきっかけのひとつとなっていることが推察されている。これはこうした時間帯に実習を行うことで，病棟の24時間の様子を体験するとともに，看護師の数が少ない夜間や受け持ち患者を持たず臨機応変に働く遅番の看護業務を知ることで，お互いに連携しながら働いているということが観察しやすかったためではないかと考える。この点についても，今後データを積み重ねることによって明確にすることができると考える。

### ４．今後の課題

チームチャレンジ実習は開始されてから４年目となるが，受け入れ病棟や実習学生の状況に合わせながらよりよい学習環境が整えられるよう，毎年少しずつ工夫を加えながら行っているため，実習方法が完全に確立しているとはいえない。さらに現在，実習の実践的な側面を病棟の担当看護師が担っているが，通常の病棟業務を行いながら学生を指導している状況であり，その負担が課題となっている。今後も実習を継続していくためには，実習に際して実習を担当する教員と受け入れ病棟の看護師が担う役割分担のありかたや，実習前の学生の準備状態などについてさらに検討を重ね，将来の看護を担う学生が，学生として最後に行なう実習の一形態としてのチームチャレンジを確立していくことが重要である。

## Ⅵ．結　論

チームチャレンジ実習を通して学生は，臨床看護師の支援を受けながら，24時間切れ目なく続く医療チームという関係性の中にある自分の役割を意識し，複数の患者を受け持ちながら，個々の患者の最適健康状態に向かって，看護実践を行うことが出来たと認識していた。また，特に診療の補助業務に関する基礎看護技術項目の経験数が増加しており，看護基礎教育と臨床看護実践とのギャップを縮め，実習の目的に適った実習が行われていたと考える。

## 引用文献


Burton,R.R., Brown,J.S., & Fischer,G.（1984）. Skiing as a Model of Instruction. B.Rogoff, & J. Lave, *Everyday Cognition: Its Development in Social Context*（139-150）. Cambridge, MA and London：Harvard University Press.

松谷美和子他（2009）. 看護基礎教育と看護実践とのギャップを縮める「総合実習（チームチャレンジ）」の評価―看護学生と看護師へのフォーカスグループインタビューの分析―. *聖路加看護学会誌*, 13(2), 71-78.

日本看護協会（2009.6.16）. *2008年病院における看護職員需給状況等調査結果速報*. 2009.8.12, 日本看護協会：http://www.nurse.or.jp/home/opinion/newsrelease/2009pdf/20090616-1.pdf

佐居由美他（2009）. 看護基礎教育と看護実践とのギャップを縮める総合実習の効果―看護学生から臨床看護師へ―. *聖路加看護学会誌*, 13(1), 24-32.

英文抄録

# Evaluation of the Integrated Nursing Practice "Team Challenge" : Bridging the Gap Between Theory and Practice —Analysis of Training Records of Students—

Hiromi Oku [1], Miwako Matsutani [1], Yumi Sakyo [1], Nobuko Okubo [1], Nobue Yasugahira [1], Sumiko Satake [1], Ayako Nakamura [1], Minako Ito [1], Narumi Hori [1],Toshiko Ibe [1], Rie Nishino [2], Kyoko Takai [2], Asako Terada [2], Sugako Iwasaki [2], Akiko Ishimoto [3]

1) St.Luke's College of Nursing, 2) St.Luke's International Hospital, 3) Hatsudai Rehabilitation Hospital

【Purpose】In order to explore the clinical practice which bridges the gap between theory and practice of senior nursing student, comprehensive clinical practice called 'team challenge' was performed. The purpose of this study is to analyze the contents of study from students' practice records, and to evaluate achievement of a practice aim.

【Method】From practice record of five seniors in A nursing college who experienced practice, 1) the contents of learning was extracted to the time series and the process of a student's practice was analyzed from four viewpoints of the practice aim, 2) amount of technical experiences were compared at before and after the practice. This study has obtained the approval of research ethics screening committee of A college.

【Result】1) ① Understanding patients:Students were depending on patients' charts and textbooks for gathering information, then they gradually acquired those from clinical nurses and patients themselves. ② Practice to the optimal health condition of patients: Students were perceiving the necessity of participating preventively and gradually they could act in accordance with the change of patients' unexpected condition. ③ As one of the members of a team: The importance of information exchange has been recognized in the beginning, students gradually found the difficulty of actually telling, selecting meaningful information to team members. ④ Exertion of a role and a function: The students were able to increase the number of charge patients gradually, then they also recognized that their action plan had to be corrected timely in accordance with a clinical situation. 2) On the whole, students' experience of nursing/medical techniques were increased especially in medical examination, students could at least observe and could be performed when support was given.

【Discussion】Students were aware of themselves being inside of a medical team by receiving a clinical nurses' support. They were able to utilize their knowledge and technique toward patients' optimal health condition, taking charge of two or more patients. Practice which suited the practice aim was performed.

**Keywords**：senior nursing students, integrated nursing practice, reality shock, training records